

## 社会科学方法論としての弁証法の定式化

### 空間的運動形態と機能・制限

板 木 雅 彦

わたしたちはこれまで、事物の本質と存在形態を中心に考察を進めてきた<sup>1)</sup>。

事物の存在を、個別的・特殊的・一般的という三つの基本形態と、一様性・多様性・統一性の三つの基本視角から観察することで、その本質を把握する術を学んできたわけである。しかし、いままでの分析を通じて繰り返し強調してきたように、わたしたちがつかみ取らなくてはならない事物は、つねに運動と変化の過程にある事物である。そのような事物をまずは静止状態に置くことによって、いわばそのスナップ・ショットを写し撮るような具合で観察したものが、基本的な存在諸形態であったわけである。

いよいよここからわたしたちは、事物を運動と変化のなかで観察していくことになる。

さて、この「運動する事物」ということの意味を表象豊かに理解するために、ここでチェスを具体例として取り上げることにしよう。チェスとは、いうまでもなく、古代インドに生まれ15世紀に現行ルールが確立された「西洋将棋」のことである。サイバネティックス理論を確立したノーバート・ウィーナーによれば、いくたの実戦経験から導かれたチェスの原理は、次の4つの項目に整理することができるという(ウィーナー [1961](1962) 206 - 7ページ、参照)。

- 1) 駒の損失 (loss of pieces)
- 2) 動きやすさ (mobility)
- 3) 勢力範囲 (command)
- 4) 駒の展開 (development)

これらの項目は、競技が展開していくにつれて、局面ごとにそれぞれ重要度が変化するという。チェスのプロでもないわたしたちは、いったいこのうちのどの項目が序盤戦に重要であり、またどの項目が中盤戦や終盤戦の勝利の鍵を握っているかについて、確たることはとうてい言うことができない。ただ、この4項目をよくよく眺めて相互の関連性を検討してみると、これらが、じつにみごとにチェス

という盤上競技の運動と機能の本質を衝いたものであることが次第に明らかになる。

まず、チェスを構成する基本要素は、駒である。なかでもポーンと呼ばれる歩兵（日本将棋の歩）をもっとも基本的な要素とし、その他すべての駒（たとえば、ビショップ、クイーン、キングなど）は、これから派生した特殊形態とみなすことができる。これを前提として、チェスという盤上競技の基本運動は、「駒の得失」である。この「駒を取る」という運動がチェスにおける全運動の基本であり、また基本機能であるということができる。

次に、目指す相手の駒を取るために、いくつもの味方の駒が連携して種々の作戦行動を展開しなければならない。つまり、複数の駒の動員と連携プレーが、盤上のそこで展開されるわけである。このとき競技者が手に入れようとするものは、相手に対する「動きやすさ（mobility）」（言い換えれば、作戦行動上の自由度である）とすることができる。

最後に競技者は、盤上のさまざまな局面・地域で展開されている特殊的な作戦行動をすべて総括して、全盤上における勢力範囲で支配権（command）を確立しようとする。究極的に相手のキングを陥れるためには、全般的な支配権が盤上に確立されていなければならない。これによって、駒の空間的展開は、もっとも一般的な運動・機能形態を手に入れたということができる。

もっとも、全般的な支配権の確立なしに勝利が転がり込んでくることもある。いわゆる番狂わせがそうである。しかし、この場合の勝利は文字通り偶然の産物であって、もう一局戦って同じように勝利が転がり込んでくる保証はどこにもない。いやむしろ、実力の差に応じて今度は次から次へと負け続けることのほうが多かるう。つまり、ここでウィーナーの試みようとしているチェスの定式化は、必然的勝利のそれであって、「棚からぼた餅」式のそれではないのである。

しかし、空間的支配権を得たからといって、それがそのまま最終的な勝利に直結するわけではない。この空間的支配権とその勢力範囲を拡大再生産していくこと（ウィーナーの整理で言えば「駒の展開（development）」）ができてはじめて相手のキングをチェックメイト（詰め）に追い込むことができる。つまり、「駒の展開（development）」とは、チェスの時間的運動と機能を表わす原理であるということができる。

このように再整理してみると、ウィーナーの掲げたチェスの4つの原則が、新しい光のもとに照らしだされてくるとは言えないだろうか。この分析視角のもとにわたしたちは、チェスという盤上競技の構成要素から出発し、それが空間的にどのように展開し、時間的に

どのような経過をたどってチェックメイト（詰め）にいたるかという一局のライフ・サイクル全体を視野に収めることができる。その意味でこの4原則は、チェスの運動と機能の本質をじつに的確に表現したものであって、弁証法的方法と思考をみごとに体現したものであることがわかる。

余談だが、ウィーナーは、この4つの原則のもとにフィードバック機構を組み込んだ「学習する機械」を考案し、それを「無敵のチェス機械」とする方法について次のように述べている。

「この機械は2, 3ゲームごとに時間をとり、この時間にはその装置を別なことに使う。このときには、機械は相手とチェスを指さずに、記憶装置に貯えられているいままでのすべてのゲームをしらべて、こまの値うち、勢力範囲、うごきやすさ、そのほかの評価をどういう重みで行なえば、一番勝利に役に立つかを整理する。こうして機械は、自分の失敗からも、相手の成功からも何事かを学ぶ。機械は、前の評価法をあらためて、新しい、より優れた機械として、ゲームをつづける。この機械の個性は、融通のきかないものではないから、一度成功したはめ手でも、ついにはきかなくなる。それどころか、いつかは相手の作戦を逆用することもできる。」（ウィーナー（1962）207ページ）

このすぐ後でウィーナー自身が嘆息しているように、「チェスの場合、これらのことを実現するのは大変むずかしい。実際のところ、名人級のチェス機械が作れるほど、こういう技法もまだ十分進んではない」（同上）。ところが、彼がこれを書いた30数年後、ついにチェス機械は人間を打ち負かすことに成功した。しかも、ウィーナーが予言した通りの方法で。

1997年5月、チェスの世界チャンピオンのギャリ・カスパロフはIBM社のコンピュータ「ディープブルー」と対戦し、1勝2敗3引き分けで敗れた。引き分けの多いチェスの世界で、この戦績はまさに完敗であった。報道によれば、カスパロフは、ディープブルーの「読み」の深さに圧倒されただけでなく、一局ごとに「棋風」が変わること、人間ならかならず持つはずの「くせ」が見られないことに戸惑いを感じたという。

たとえば、第1局では、ディープブルーはナイトよりもビショップに高い価値をおいた指手を進めていたのに、第5局では、自分のビショップをカスパロフのナイトとあっさり交換してしまった。そのため、カスパロフは予想が狂い、その後すっかり思考を乱されたという（子安（2000）8 - 10ページ）。以上、長々としたチェスの例から浮かび上がってくることは、事物の運動をとらえようとする場合にも、いままで事物の本質と存在形態を分析したときと異なる新しい方法が導入されるわ

けではけっしてないということである。

まず、運動する事物の純化された表象を思い浮かべて要素に分解すること、そしてその要素から再び運動を組み立て直すこと　これが基本である。このような弁証法的分析手法・思考様式の基本を貫くことで、たとえば人工知能の開発のための基礎理論を構築することが可能であることは、ウィーナーのサイバネティクス理論が教えてくれている。

では改めて、事物を運動と変化のなかで観察していくことにしよう。最初にまず、これからの議論の便宜のために、運動する個別的事物の純化された表象の定式をあらかじめ掲げておくことにしたい。

運動する事物の純化された表象

= [ 連関性 (機能性・制限性)      空間的・時間的に運動する要素 ]

さて、まず最初に言うておかなばならないが、「事物の運動」をとらえるというのは、まことにむづかしい作業である。

そもそも、「運動」という言葉自体が、わたしたちにさまざまなイメージを喚起することから発するむづかしさがある。もちろん、このことがわたしたちに事物の運動と変化に関する豊かな表象を保証していることも確かなのだが、それだけに、複雑に絡まった表象と表象のあいだの慎重な切り分けが求められる。運動とは何か　わたしたちはまず、ここから分析にとりかからなければならない。

もっともありふれた運動の表象は、文字通り、物が「動いている」状態である。たとえば、俳優が舞台上を「動く」とは、舞台という演劇空間を彼の肉体でもって切り裂いていくことであり、そこには、彼の肉体の空間的な移動があり、それにともなう時間の経過がある。当然なことではあるが、時間の経過なしの空間的運動はありえない、ということをまず確認しておかなければならない。つまり、運動は、つねに**空間的運動**であると同時に**時間的運動**でもある。

このことはたんに、空間的移動には「暇がかかる」といったことだけを意味しているのではない。あらゆる事物は、その空間的運動にともなって、そのもの自体が変化している

つまり、内部の構造や機能が成長したり、転換したり、衰退したりしているわけである。俳優だってそうである。老優は、舞台の上の一步一步ごとに、彼の技量をますます高めていくと同時に肉体の衰えを深めていく。ここに空間的運動と時間的運動の現実的な統一の姿がある。

しかし、わたしたちは、この両者の統一を無理やりにも切り裂かねばならない。ただし、現実にはなく、あくまでわたしたちの脳髓のなかで論理的に、ではあるのだが。

わたしたちは、事物の空間的運動を、そのもの自体に生ずる時間的な変化から切り離して

理解する。そして、その後にはじめて、全面的な空間的運動を展開する事物の内的な再生産運動として、時間的運動を理解する。これが、わたしたちがこれからたどろうとする論理的分析の道筋に置かれた第一の道しるべである。

しかしまた、このように時間的運動から分離された空間的運動と言っても、事物そのものが環境のなかで自生しているような高度な運動の形態を最初から分析の対象にすることはできない。事物の運動を、まずその要素のレベルでつかむことから出発しなければならない。これが、わたしたちの第二の道しるべである。

わたしたちの頭のなかには、すでに一般的形態を確立した事物の存在諸形態の姿がある。この確立された一般的存在形態を前提にして、まずはたった一つの要素の空間的運動を考える。次には、連結された多数の要素が生み出す空間的運動を見る。そして最後に、事物を構成する全要素が一般的要素に統括されながら展開する空間的運動を観察する。これが分析の手順である。

したがって、事物の空間的運動をとらえるときに用いられる手法は、いままでとまったく変わらない。これまで繰り返し強調してきたように、わたしたちはつねに、表象を概念に換えることによって事物を認識するのだから、この場合にも、事物の運動をいくつかの基本形態に置き換えること　具体的には、運動の**個別的形態**、**特殊の形態**、そして最後に**一般的形態**をおさえることで、事物の運動を認識する。なぜなら、この三つの形態のなかに、運動の必要かつ十分な内容が反映されていると考えるからである。言い換えれば、わたしたちは、事物の運動を空間的形態転換運動として　そして、時間的形態転換運動として　認識するわけである。

では、事物の要素が個別的、特殊の、一般的という具合に互いに連結しつつ運動を展開していったとして、そこに生み出される連関性とはいったいどのようなものだろうか。わたしたちは、それを事物の**機能性**と理解したいと思う。

これを空間的運動で考えれば、個別的要素の個別的運動形態、連結した諸要素の特殊の運動形態、事物が全体としての統合性を実現する一般的運動形態、という具合に観察の眼を次第に広げていくにしたがって、わたしたちは、互いに連関しあう要素のあいだに、主体的に運動を展開する要素と、その運動を媒介する要素の区別が生じていることを発見するだろう。このように、他のものの運動を媒介するという働きが、一般に**機能**と呼ばれているものの内容である。

わたしたちは普段、「エンジンはちゃんと機能している」とか、「政府が機能停止に陥っている」というように機能という言葉を用いている。つまり、何かある特定のものが、ある役割をはたしながら動いていることを、「機能している」と表現するわけである。一般に機能というカテゴリーは、たとえば、身体組織における感覚器官の機能

であるとか、経済組織における貨幣の機能であるとか、あるいは社会における国家の機能というふうに、ある一定の関係をもって成り立っている組織の特定部分がはたす役割とか働きといった意味で用いられる（森（1985）90ページ）。

わたしたちのカテゴリーを用いてこれをより正確に表現すれば、存在の一般の形態で明らかになった一般的要素が、その他諸要素の運動を媒介する、その媒介運動のことを機能と呼ぶわけである。

なぜ一般的要素によって媒介されなければならないかということ、要素が本来自分たちに備わっていた連関性を一般的要素に委譲し、これとの関係を通じてはじめて相互の関係を取り結ぶことができるからである。つまり、要素は「媒介される」のであり、一般的要素がこれを「媒介する」わけである。これが、機能を理解する際の基本的な関係である。

言い換えれば、事物の機能とは、個別的要素の空間的・時間的運動を媒介する一般的要素の媒介運動である。一般的要素も結局は一つの要素に過ぎなかったように、媒介もまた一つの運動なのだという点は、十分留意されてよい。また、このことを逆に言えば、なぜ事物に機能が備わるかと言えば、それはその事物が運動しているからであって、運動のないところには機能も媒介も存在しない。

ここで、いままでかなり抽象的に説明してきた空間的運動・機能形態と時間的運動・機能形態の内容を、いま一步具体的に理解するために、物理学で用いられる「運動エネルギー」という考え方を援用して説明してみることにしよう。

物理学でいう運動エネルギーとは、運動している物体がもつエネルギーのことで、質量を $m$ 、速度を $v$ とおくと、 $(1/2) m v^2$ と表わすことができる。速度 $v$ は、物体の位置ベクトル $r$ が時間 $t$ の関数として与えられるときには、その位置ベクトルを時間で微分して求められる。すなわち、 $v = dr / dt$ となる。また、加速度 $a$ は、この速度をさらに微分して求めることができる。すなわち、 $a = dv / dt$ がそれである。ここから、物体に加えられる加速度によって速度が増し、速度が増すことによって物体の運動エネルギーが尻上がりに増大することがわかる。

事物の量的変化をこの「運動エネルギー」の増大に置き換えて、空間と時間にかかわる運動・機能形態をわかりやすく再定義すると、次のような内容になると考えられる。すなわち、

事物の空間的運動・機能形態とは、その事物が空間的に最大限の運動エネルギーを保持しようとして生み出すさまざまな形態的な、あるいは組織的な工夫である、というのがそれである。また事物の時間的運動・機能形態とは、それが保持する運動エネルギーを時間の経過とともに最大限増殖しようとして生み出すさまざまな形態的な、あ

るいは組織的な工夫である，というのがそれである。

「運動エネルギー」の空間的保持 物体が「速度」を最大限に保つためにどのような機能的工夫を凝らし，それをいかにして自分自身の内部機構として組み込んでいるか。「運動エネルギー」の時間的増殖 物体が「加速度」を加えながら最短時間で最大速度の獲得を可能にするために，どのようなエネルギーの再生・蓄積メカニズムを獲得するに至っているか。この二つのテーマを解明することが，運動・機能形態論の課題である。

このような物理学の世界における速度と加速度と運動エネルギーの関係を経済学の例に当てはめて考えれば，資本の利潤率が物体の速度に対応し，資本の蓄積率が物体の加速度に対応すると考えることができる。

まず，資本の利潤率は，資本という「社会的物体」つまり，社会関係の体化物のもつ「運動エネルギー」を構成する速度であって，資本1単位がある瞬間に保持している「社会的運動エネルギー」を表わす一種のパラメータであり，その計量のための尺度であると考えることができる。

わたしたちが剰余価値論で研究していることというのは，煎じ詰めれば，利潤最大化のための資本の空間的運動・機能形態論であるということができる。具体的に言えば，絶対的剰余価値の生産，特別剰余価値の生産，相対的剰余価値の生産がその諸形態であり，社会的剰余価値生産の媒介機能を全面的，かつ一般的に担う商業資本の存在意義と論理的な生成過程を取り扱うことが課題となっている。

また，資本の蓄積率は，物体の加速度に相当し，資本1単位に加えられた新たな力が，資本の保持する「社会的運動エネルギー」の増分となる。そのような「新たな社会的力」の尺度が蓄積率の意味するところであると言えるだろう。

したがって，わたしたち経済学者は，資本蓄積論において利潤の時間軸上の最大化，言い換えれば資本の時間的運動・機能形態を考察していることになる。具体的に言えば，資本の循環運動，回転運動，回転循環運動がその諸形態であり，この研究を通じて，資本の単純・拡大再生産のプロセスが明らかにされることになる。

この「社会的運動エネルギー」の考え方をさらに歴史的に引き延ばして用いれば，現在わたしたちが暮らす資本主義社会を越えた新しい生産様式をもった社会においては，それまであらゆる社会関係の尺度であり，体化物であり，そして原動力そのものであった利潤率に代わって，「消費率」がそのような社会的機能をはたすことになると予想される。

この場合の社会的目標は，かならずしも「消費量の空間的・時間的最大化」ではないかもしれない。むしろ，最大化でも最小化でもない「最適化」つまり，物的な生産・消費活動にともなう労働と環境にかかる費用や負荷をどのように空間的・時間的

にバランスさせるか が、新しい経済学の研究課題となるかもしれない。そのような社会の運動主体は、もはや「資本」ではない。資本は廃棄され、自由時間（＝余暇時間）とバランスされた労働時間、そして廃棄物リサイクルと連動された生産・消費活動の両方を体化した社会的生産物（＝「資財」）が、はじめて現実的な意味をもったものとして歴史の舞台に登場することだろう。

ところで、空間的・時間的に運動する要素が生み出す連関性は、機能性だけではない。そこには、**制限性**というまったく対立的な連関性が同時に生み出される。機能性が事物の運動を媒介することであるのに対して、制限性というのは、反対に事物の運動を制限することを意味している。

すでに板木（2002）「第3節 7. 矛盾」のところで明らかにしたように、歴史貫通的な素材が要素という特殊歴史的形態をとることによって、事物のなかには不可避免的に矛盾がはまれることになる。つまり、要素の量的な発展を促しつつも、事物が事物にとどまるためには、素材そのものがもつ量的発展力、歴史普遍的結合力をある上限以下に押さえ込む機構を備えていなければならない。このような、事物のもつ連関性のネガティブな側面を表わすものが「制限性」にほかならない。

この制限性という連関性の一側面は、もう一つの機能性という側面そのものから生ずるものである。具体的に言えば、個別的運動・機能形態のなかを生ずるものが個別的制限性であり、この制限を克服すべく個別的形態は特殊的運動・機能形態へと展開していく。しかし、この特殊的形態もまた、そのなかに特殊的制限性をはらむこととなり、これを突破すべくさらに一般的運動・機能形態へと展開していく。そして、この一般的形態もまた、一般的制限性をそのなかを生ずることにならざるを得ない。

しかし、事物は、事物であるかぎりこの一般的制限性を克服することができない。なぜなら、一般的制限性というのは、歴史普遍的素材が特殊歴史的要素という形態をとることによって生じた、事物にとっての根源的な歴史的限界にほかならないからである。これを克服しようとすることは、事物の歴史的形態そのものを否定することである。要素が運動を行なうこと、運動しつつさらに量的に連結を拡大し、新たな質を獲得しようとするこのような事物の運動そのものが究極的に生み出したものがこの一般的制限性＝**限界**にほかならない。

このように現実の事物は、機能性と制限性という二つの対立的性質の統一物として空間的・時間的に運動し機能することになる。そして、この機能性と制限性は、事物の三つの存在様式

すなわち、一様性、多様性、統一性それぞれに現れる性質であることに留意しなければならない。わたしたちがこれから展開しようとする運動形態論は、一言で言えば、このような事物の機能と制限との連続的な矛盾によって突き動かされる諸形態の展開過程なのである。



## 空間的運動形態

空間的に展開する事物の純化された表象は、次のように定式化することができると考えられる。

空間的に展開する事物の表象

= [ 連関性（一般的要素の空間的媒介・制限性）

空間的に展開する諸要素 ]

= [ 空間的展開を媒介・制限する一般的要素

空間的に展開する諸要素 ]

事物の行なう空間的運動ということに関して、最初に正確な定義を与えておかなければならない。これは、事物の静態的運動、あるいは、事物の運動をまず空間的展開として、すなわち時間を捨象した静態的運動として認識したものと言うことができる。これを言い換えれば、事物が空間的に統合された連関性を維持している状態と言うことができる。

このように、「状態」という表現を用いると、「はたして、状態は運動か」という疑問が生ずるかもしれない。しかし、事物は、一定の状態を維持するためにもつねにある種の運動を行なっていなければならないのであって、たとえば、わたしたち人間が安静な状態を保っているときにも、新陳代謝がつねに行なわれていることによってはじめて生命を維持することができるようなものである。これをここでは、静態的運動と呼んでいる。

これがまた「空間的運動」とか「空間的展開」とも呼ばれる理由は、第一に、空間的統合にかかわる運動であるということと、第二には、以下で行なうように、わたしたちの分析方法が、個別的形態から特殊的形態、一般的形態という具合に、認識上空間的に拡張する方法を用いていることによる。

したがって、個別的要素から出発し、これが空間的に連結して完成された一般的存在形態が次第に形成される事物の現実の歴史的な生成過程をこれから観察しようとしているのでは決してないということに、くれぐれも留意してもらいたい。事物の一般的存在形態は、分析の最初から前提されているのだから。

事物の運動形態の分析では、わたしたちが存在諸形態を論じた節で用いたのとまったく同じ方法が採用されている。

すなわち、まず「顕微鏡」を用いることで、個別的要素の運動を観察する。このことはまた同時に、これを媒介する一般的要素の機能・制限形態を観察することでもある。次に「虫眼鏡」を取り出して、こんどはさまざまに連結された諸要素が展開する運動とそれを媒介する一般的要素の機能・制限形態を観察する。そして最後に、わたしたちの「肉眼」

で事物の全体的で統合された運動形態を観察する。これが、ここでわたしたちが採用する分析の手順である。このような分析手順をへることによって、わたしたちは、要素の運動諸形態、一般的要素の機能諸形態を明らかにすると同時に、そのような要素の運動や一般的要素の機能を阻害し制約する制限諸形態にも順次光を当てることができる。

さて、三つの空間的運動形態の展開を通じて、わたしたちが認識上、明らかにすることができる事物の本質は、事物の空間的機能の統一性である。存在形態論において、まず事物が何故に、そしてどのような姿で存在するかが明らかにされ、この空間的運動形態論において、今度はその事物がどのような仕方で空間的に存在しているのかが明らかにされるわけである。

事物というものは、たんにある一定の形態をとって存在しているというだけでは、じつはほんとうに存在していることにならない。それは同時に、運動し機能していなければならない。そして、事物がその事物にとどまるために、ある一定限度を越えて要素が発達しないように制限を加えていなくてはならない。またさらには、この運動し機能し制限するということが、全要素に対して及ぼされているのでなければならない。このすべてを包括したものが、存在の空間的統一性の意味していることの内容である。

では、この空間的に展開する事物の諸形態を展開していくことにしよう。

個別的形態 = [ 個別的要素    潜在的媒介・制限 ]  
                  = [ 個別的要素    個別的代理要素 ]

一体となって空間的運動を行なっている事物からたった一つだけ要素を取り出して、その運動の様子を観察するのがこの個別的形態である。

ただし、一つ一つの要素と、それが連結して構成される事物とが質的に異なったものであるように、個別的要素の運動と事物そのものを行なう運動とはまったく別物であるという点にくれぐれも留意しておこう。個別的形態では、事物そのものの運動は、個別的要素にとって外的に前提されたものにとどまっている。

個別的存在形態と違って、個別的な空間的運動形態の場合には、すでに一般的存在形態と一般的要素の存在が前提されている。したがって、たとえ個別的要素といってもその運動は、やはり一般的要素によって媒介されている。では、この個別的形態の定式に現れた「潜在的媒介」の意味するところは何か。そして、**個別的代理要素**とは何か。

わたしたちはすでに、全要素の連関性が一般的要素に委譲されていることを知っている。一般的要素を除くあらゆる要素間の連関は、この一般的要素と関係づけられることを通じて間接的に達成される。したがって、一つ一つの要素の運動もまた、すべてこの一般的要素によって統一的に媒介されていなければならない。

しかし、事物が空間的に拡大し、その要素が量的に増大していくにしたがって、一般的要素だけで広範囲にわたる統一的な媒介活動を行なうことは、実際問題としてきわめて困難になってくる。こうした現実的な困難に直面した事物は、一般的要素を機能的に代理する代理要素を生み出すことでこれを乗り越えようとする。

代理物（agent）とは、すべての媒介性を体現した一般的要素から機能的な権限を一部委譲され、一般的要素に代わってその特定機能を行行使する要素をいう。代理にもとづく機能的な効果は、すべて一般的要素に帰属する。一言で言えば、代理要素とは、媒介機能を具体的に実体的に担っている媒介物（媒体）であるということになる。このような代理要素を適宜投入することによって、要素の量的連結を一気に拡大させることが可能になる。

他方、一般的要素の方はどうしているかという点、委譲された特定機能に関しては、自分自身が媒介運動のために駆けずり回る必要はない。ただそこに、じっとしておればよい。ただし、代理物が委譲された機能を遂行するうえで何らかの不完全性や瑕疵が生ずれば、代理物に代わって一般的要素そのものが登場して、媒介運動を完遂しなければならない。そのために一般的要素は、いわばつねに目を光らせていなければならないわけである。

個別的形態の場合には、個別的な代理要素が一般的要素の機能を代理する。一つ一つの要素の運動を媒介するのであるから、要素の数だけ代理要素が必要であることになる。この非効率性を克服するために、観念的な性質をもった個別的な代理要素が一般的要素を機能的に代理する役割を担うことになる。個別的でしかも観念的なことから、「数」は無制限である。

後にいくつか例を示しながら説明することになるが、この個別的形態を理解するのにもっともふさわしい例は、商品の運動を媒介する貨幣の機能形態であろう。

その個別的機能形態は価値尺度機能であり、個別的な代理要素は観念的貨幣である。以上、まず第一に、この個別的形態においては、事物全体の運動がまだ潜在的に前提されるにとどまっていた、顕在的・全面的な媒介に至っていないという意味と、第二に、一般的要素の媒介機能が個別的で、しかも観念的な代理要素によって代替されているという二つの意味において、「潜在的媒介」と規定されるわけである。

ところで、歴史貫通的な素材が特殊歴史的な要素という形態をとることによって、事物のなかに、それ自身によっては越えることのできない限界が埋め込まれることについては、すでにこれまで何回か触れてきた。この限界は、たとえ個別的形態とはいえ、この形態のなかにも観察することができる。要素の量的な展開を根本的に阻む限界が、この個別的形態においては、個別的制限という形をとって現れる。このように、個別的形態を制限性という観点からとらえ

たものを、わたしたちは、個別的制限形態と呼ぶことにしたい。

いくつかの例証を用いた詳細な検討は後に行なうとして、ここでは少しでも具体的なイメージをつかむために、再び貨幣の例を取り上げてみよう。商品生産社会　つまり、私的諸労働が社会的分業を形成する社会では、貨幣なしに生産物の社会的な配分・分配を行なうことができない。つまり、それ自身労働生産物であり、価値をもった商品である貨幣は、商品生産社会にとって、けっして取り除くことのできない死重、すなわちその根源的な限界を物的に体現したものである。この死重をできるかぎり軽いものにするために、商品生産社会は、さまざまな工夫を凝らしているのだが、その個別的形態における現れが個別的代理要素、すなわち観念的貨幣による価値尺度機能の代替である。

たしかに、貨幣が観念的であるかぎり、いっけん当該社会の生産に対する負担にならないようにも思えるが、しかし、その観念的な存在がほんとうに意味をもつためには、かならずどこかに生身の金が貨幣そのものとして　社会的空費の一大項目として　控えていなければならない。したがって、価値尺度機能を代替する観念的貨幣もまた、依然としてその社会の生産力の発展にとっての制限となっているわけである。

さらにまた、貨幣の価値尺度機能だけでは、商品生産・流通を実際に媒介し、実現することはけっしてできない。ショーウインドーの商品に値札が付いているだけでは、その商品が売れたことにはならないわけである。したがって、観念的貨幣による価値尺度機能は、たとえ潜在的にしろ、流通手段としての貨幣、支払手段としての貨幣、等々の存在と機能をかならず前提にしているわけである。

以上の二つの意味において、商品と貨幣の個別的運動形態は、けっして乗り越えることのできない制限性を抱えている。したがって、商品生産社会は、商品生産・流通を現実に媒介しつつ、貨幣の死重を最小限に抑えるべく、次の特殊的運動形態を必要とするわけである。

上の例からも明らかのように、事物にはらまれる個別的制限とは、事物の歴史的限界性が個別的運動形態において現れてたものであるということが出来る。その歴史的限界を、個別的運動形態は、個別的代理要素を生み出すことによって乗り越えようとする。観念的な個別的代理要素の登場によって、この企てにある程度は成功するのだが、根本的な限界を取り除くことはとうていできない。なぜなら、歴史的限界とは、事物の運動が一般的要素によって媒介されなければならないことそれ自体にはらまれた限界だからである。

たしかに、事物が運動するかぎり、諸要素の運動は一般的要素によって媒介されなければならない。この媒介機能それ自体は歴史貫通的な現象である。しかし、その媒介機能がある特殊歴史的形態をまとったある特定の一般的要素に担われているということから、歴史的限界が発生する。つまり、諸要素から区別されたある特定の一般的要素がそもそも存在

しなければならないということ、あるいは、諸要素の運動の媒介のために、いわば一種の必要悪のようなものとしてこの一般的要素と代理要素を事物が抱えていなければならないということ。これが、歴史的限界なのである。事物が事物であるかぎり、歴史的限界そのものは、けっして乗り越えることができない。

しかし、この歴史的限界の個別的制限形態を乗り越えることは可能である。言い換えれば、この負担をできるかぎり軽量なものにする運動形態の工夫は、可能なのである。これが、次の特殊の形態への展開の契機。すなわち、論理的で、かつある程度まで歴史的な展開の原動力をなしている。

特殊の形態 = [ 顕在化する特殊の媒介・制限 展開する諸要素 ]  
= [ 特殊の代理要素 展開する諸要素 ]

特殊の形態は、一般的存在形態のなかで相互に連結された諸要素がさまざまに繰り広げる空間的運動を観察する形態である。このとき一般的要素は、事物の空間的な統一性を維持すべく、特殊の媒介機能を担うことになる。そして、実際の目的からこれを代理するものとして、諸要素のそれぞれの特殊な連結に応じて特殊の代理要素が形成される。

この代理要素に特徴的なことは、事物そのものの運動が顕在化するのに対応して、これを実際に媒介するために、もはや観念的な代理物にとどまることができない点にある。たしかに代理物ではあっても、ある実体をもったものとして媒介過程に実際に登場してこなければならない。

ここでもわたしたちは、貨幣の例によってこのことを簡単に例証しておこう。貨幣の特殊の機能形態とは流通手段機能のことであり、貨幣が諸商品の交換の仲立ちを連続して行なうことによって、限られた量の貨幣によって大量の商品交換が実現される。これがなぜ特殊と呼ばれるかということ、貨幣によって媒介される商品流通部面は、小売業のように比較的小規模で、しかも地域的に限定されたいくつもの特殊の流通部面に分かれているからである。

また、この場合には、紙幣や鑄貨といった実体をもった代理物が特殊の代理要素の役割をはたすことになる。たとえ小規模とはいっても実際に商品を流通させなければならず、これを媒介するには観念的貨幣ではもはや役に立たない。紙幣や鑄貨といった実体をもった代理物によって現実に媒介しなければならないからである。

この流通手段としての貨幣によく表わされているように、特殊の形態は、要素の現実の空間的運動を可能にすると同時に、そのために必要となる死重としての一般的要素の負担を小さくすることのできる形態である。一定量の一般的要素が媒介機能を連続して行なうことのできる空

間的範囲を拡大することによって、その効率性を高めている。その意味で、個別的制限性が克服されているわけである。しかし、それでもなお特殊的制限性が新たに生ずることになる。

たしかに、この特殊的形態によって事物の運動は空間的に拡張されたが、それは特殊的形態をいくつも並列的に組み合わせることで実現されたにすぎない。つまり、それぞれがあくまで特殊的形態にとどまっているために、相互に緊密な連絡がなく、全体として統一性を欠いている。したがって、一般的要素が節約されたといっても、やはりそれぞれの特殊的形態ごとに一般的要素や特殊的代理要素が必要な事態は変わっていない。また、統一性の欠如から、特殊的形態相互間の媒介のためには、依然として一般的要素が必要とされる。さらにまた、いざという場合に一般的要素が代理物の代わりに登場してこななければならないこともしばしばである。

上の貨幣の例で言えば、流通手段としての貨幣によっては大規模な卸売商業を営むことができず、商品流通を全面展開することができないことにこれがよく示されている。また、紙幣や鋳貨も大きな制限を抱えている。たしかに商品流通が滞りなく進行しているかぎり、貨幣商品・金は紙幣や鋳貨によって代理させることができる。しかし、商品生産社会に固有の生産の無政府性によっていったんこれが滞りはじめると、兌換紙幣は金に交換され、不換貨幣は忌避される。つまり、紙幣や鋳貨があくまで代理物であって、その背後にはつねに社会の死重たる貨幣・金が控えていなければならないことが明白になる。

このような特殊的制限性を突破すべく登場するものが、次の一般的形態にほかならない。

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限    個別的要素 }  
                  { 展開した諸要素    潜在的媒介・制限 } ]  
= [ { 顕在化した一般的媒介・制限    一般的代理要素 }  
                  { 展開した諸要素    実現された空間的展開 } ]  
= [ 一般的要素 / 一般的代理要素    展開した諸要素 ]

この一般的運動形態を獲得することによってはじめて事物は、一般的要素の整合的な媒介機能に助けられて、もっとも高度な空間的統一性を実現することになる。つまり、個別的形態にみられた空間的な機能面における単純性と、特殊的形態の全面展開性とを統一した一般性がここに確立するわけである。そのメカニズムの秘密は、**一般的代理要素**の確立にある。

要素のなかから、一般的要素とは別に、その機能を全面的に代理する一般的代理要素が抽出される。展開した諸要素の実際の運動を媒介する役割は、ほとんど完全にこれによってはたされる。この一般的代理要素の機能を一言でいえば、相殺機能ということに尽きる。

つまり、諸要素がさまざまな組み合わせのもとに形作る特殊の形態のあいだの相互作用を利用して、それらを互いに掛け合わせ、相殺させ、そして最後に残った部分を一般的要素そのものが集中的に媒介するわけである。このような相殺機能をもっとも効率的に発揮することによって、要素の量的拡大を限界ぎりぎりまで実現することが可能になる。

したがって、この一般的代理要素によって一般的要素そのものが置き換えられてしまうわけではけっしてない。たしかに、全要素が運動する舞台の上で実際に「汗をかき」、媒介の労をとるのは一般的代理要素だが、その後ろにはかならず一般的要素そのものが控えている。そして、代理要素によっては処理しきれない最後の総決算を担当したり、代理要素の媒介活動の裏付けとなる保証機能をはたしたりしているわけである。この場合も、貨幣を例に取ろう。一般的運動形態は、中央銀行の成立によって全国的な貨幣制度が確立された状況にちょうど対応していると考えることができる。中央銀行のもとに貨幣・金が集中され、紙幣が中央銀行券に置き換えられる。そして、内国送金為替制度の相殺効果によって、最小限の現金送金で全国の商品流通網が空間的に統合される。こうして国内における金の現送費用をすべて中央銀行が負担することで、各地の商品流通網のあいだには依然として物理的距離が存在しているにもかかわらず、資本家にとって「経済的距離」がゼロとなるわけである。

しかし、事物が空間的統一性を獲得する手段は、一般的代理要素だけではない。一般的形態の確立を契機として、その一般的要素と一般的代理要素のイニシアティブのもとに、個別的形態と特殊の形態が再編成される。そして、この三形態が並存し、事物を取り巻く外的環境の特殊性に応じて機能的分業関係・補完関係を形成することによって、一般的形態だけでは手の及ばない空間のすみずみにまで、要素が量的に展開することが可能になる。形態的には未完成で、不完全な諸形態が、逆にその未完成のゆえに、不完全性のゆえに、一般的形態を補完するものとして、そのままに固定されて体系の一翼を担うことになる。

たとえば、失業者の例を考えてみよう。失業者は、資本・賃労働関係からはじきとばされた、運動していない労働力、可変資本である。しかし、職を失い、家でぼつねんとひがな一日を送る失業者でも、景気さえ良くなればいつでも現役に復帰できる潜在的な賃労働者なのであり、また現に彼は、そんな日が一日も早くやって来ることを願いつつ、せっせと職業安定所通いを続けている。失業者の彼にさえ、観念的な資本・賃労働関係の吸引力が及んでいるわけである。ナショナル・センターに組織された一国の労働者階級という一般的形態、産業別労働組合に組織された産業別労働者団体という特殊の形態に対して、解雇され、自分自身の力で職を求める一人一人の失業者（潜在的労働者）は、個別的形態であるということができよう。そして、一般的形態のイニシアティブのもとに従属的・補完的に個別的形態が並存することによって、一国の労働者階級総体が空間的に展開されている

わけである。

次に、貨幣の流通手段機能について考えてみよう。高度に商品経済の発達した今日の資本主義においては、卸売商業のほとんどが商業手形や銀行振替を用いて営まれる。小売商業で紙幣が流通手段として登場する場合にも、銀行信用から生まれた中央銀行券が紙幣の役割を担っている。しかし、流通手段として機能する貨幣は、たとえ商業取引総額に占める比率がいかに小さかろうと、商品流通にとって不可欠の一流通部面を担っている。これは、特殊的形態が従属的に再編成されつつ、一般的形態と並んで存在している好例である。しかし、完全な空間的統一性の実現はまた、歴史的物事そのものによっては越えることのできない一般的制限、つまり歴史的限界がしっかりと事物のなかに植え込まれていく過程でもある。その歴史的限界とは、ある特殊歴史的な一般的要素と一般的代理要素の存在そのものによって与えられるものだといってよさそう。

たしかに、一般的形態の成立によって特殊的制限は克服することができた。それまで各々の特殊的形態ごとに機能しなければならなかった特殊的代理要素が、全要素に対して機能する一般的代理要素として集中・統合されている。したがって、これに代わって一般的要素そのものが登場してこなければならない場面は、必要最小限度に抑えられている。しかし、それでも一般的要素と一般的代理要素は、事物の空間的運動にとって不可欠なものとして存在していなければならない。いやそれどころか、最大限の節約が行なわれた結果、ありとあらゆる帳尻はかならず一般的要素によって合わされなければならない、最後にはかならず一般的要素が登場してこなければならない。一般的要素は、全要素の空間的統一性を維持するために、いまやなくてはならない存在である。

貨幣の例で言えば、たとえ中央銀行によって国内の貨幣現送費用がすべて負担され、資本家にとっては経済的空間距離がゼロになったとしても、貨幣現送費用そのものがゼロになったわけではけっしてない。商品生産社会の死重、すなわち流通空費としての貨幣そのものが消滅してしまったわけではないからである。したがって、各国中央銀行によるスムーズな貨幣現送が、その国の全商品流通（＝価値実現）の鍵を握っているわけである。

つまり、この最後の一般的形態に現れた一般的制限とは、素材が要素という歴史的形態をとることに由来する歴史的限界そのものの顕在化であるということができる。したがって、事物が事物であるかぎり、この最後の制限性だけはけっして乗り越えることができない。すなわち、ここに要素の空間的拡張に対して歴史的限界が画される。言い換えれば、これ以上の空間的媒介機能は、もはや不可能なのである。

しかし、それでもなお素材そのものの歴史貫通的な連結力は作用し続け、要素は量的発展を遂げようとする。この矛盾の解決は、結局、事物の空間的分離によってはたされるしか



方法がない。空間的拡張の限界にまで達したいくつもの事物が、同一空間上に並存するわけである。ここに、個別的な事物から、複数の事物総体への展開の契機が与えられることになる。

ところで、一般的形態とそれに統括されたすべての基本的形態の確立にもなって、事物の本質を見失わせる仮象もまた完成する。

一般的要素が一身に体現しているのは、要素と要素がどのようにかかわっているのかということを表わす連関性ばかりではない。要素と要素が現実にかかわりあいながら行なう運動を一切切媒介する機能も一身に体現しているのが、この一般的要素である。しかし、実際に汗をかいて媒介運動を行なう役目は代理物にまかせておけばよい。一般的要素は、連関性と媒介性を体現する唯一絶対の定在として、ただじっとそこで目を光らせておけばよい。だからこそこの一般的要素には、事物の連関性と運動を保証する最後の拠り所として、唯一絶対の「権威と権力」が備わることになる。板木（2002）第3節「4．一般的存在形態と仮象」で取り上げた一般的要素と個別的要素との転倒した関係が、この空間的機能においてさらに発達して現れる。

しかしここに、さらに一ひねり加えられた転倒現象が発生する。本来、一般的要素と個別的要素のあいだに立って、一般的要素の「権威と権力」を機能的に代理しているにすぎない代理要素が、今度はこの「権威と権力」を自分のものとして僭称しはじめる。代理要素による「権威と権力」の篡奪が生じるのである。それはちょうど、中世封建制の時代の王と家臣の転倒した関係に似ている。

「たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼に対して臣下としてふるまうからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。」（マルクス [1867] s. 72, 78ページ）

中世封建制度における封建領主と農奴のあいだの階級関係の機能的代理物に過ぎない王が、「権威と権力」の拠り所である階級関係から相対的に自立しつつ、絶対的な権力を行使する。わたしたちは、この典型例を封建制末期の絶対主義やボナパルティズムのなかに見ることができる。また、代理関係と越権行為との尽きることのない対立、対抗は、いつの時代にも位階制（ヒエラルキー）のなかに見いだすことができるのである。

さて、わたしたちがいままで検討してきた個別的な事物の空間的展開は、要素のもつ一様性、多様性、そして統一性という三つの連関性を一まとめにした議論であった。事物の存在形態の場合と同様に、空間的運動形態の場合にも、要素そのものの内的な関係と、要素と外的環境との

関係は、厳密に区別され、そして統一されなければならない。本節の最後に、この三つをまとめて定式として掲げておくことにしよう。

空間的に展開する個別的事物の表象

= [ 内的連関性 ( 一般的要素の空間的一様化の媒介・制限性 )  
空間的に展開する要素 ]

= [ 空間的一様化を媒介・制限する一般的要素  
空間的に展開する多様な要素 ]

個別的形態 = [ 個別的要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 多様な個別的要素 一様化のための個別的代理要素 ]

特殊的形態 = [ 顕在化する特殊的媒介・制限 展開する諸要素 ]

= [ 一様化のための特殊的代理要素 展開する多様な諸要素 ]

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的要素 }

{ 展開した諸要素 潜在的媒介・制限 } ]

= [ { 顕在化した一般的媒介・制限 一様化のための一般的代理要素 }  
{ 展開した諸要素 実現された空間的一様性 } ]

= [ 一様化のための一般的要素 / 一般的代理要素  
展開した多様な諸要素 ]

空間的に展開する個別的事物の表象

= [ 外的連関性 ( 一般的要素による空間的多様化の媒介・制限 )  
空間的に展開する要素 ]

個別的形態 = [ 個別的要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 一様な個別的要素 多様化のための個別的代理要素 ]

特殊的形態 = [ 顕在化する特殊的媒介・制限 展開する諸要素 ]

= [ 特殊的多様化の媒介・制限 展開する諸要素 ]

= [ 多様化のための特殊的代理要素 展開する一様な諸要素 ]

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的要素 }

{ 展開した諸要素 潜在的媒介・制限 } ]

= [ { 一般的多様化の媒介・制限 多様化のための一般的代理要素 }  
{ 展開した諸要素 実現された空間的多様性 } ]

= [ 多様化のための一般的要素 / 一般的代理要素  
展開した一様な諸要素 ]

空間的に展開する個別的事物の表象

= [ 内的かつ外的連関性（一般的要素による空間的統一化の媒介・制限）  
空間的に展開する要素 ]

個別的形態 = [ 個別的要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 個別化する要素 個別化の媒介・制限 ]

= [ 一様かつ多様な個別的要素 統一化のための個別的代理要素 ]

特殊の形態 = [ 顕在化する特殊の媒介・制限 展開する諸要素 ]

= [ 特殊化の媒介・制限 特殊化する諸要素 ]

= [ 統一化のための特殊の代理要素 一様かつ多様な諸要素 ]

一般の形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的要素 } ]

{ 展開した諸要素 潜在的媒介・制限 }

= [ { 一般的統一化の媒介・制限 統一化のための一般的代理要素 } ]

{ 展開した諸要素 実現された空間的統一性 }

= [ 統一化のための一般的要素 / 一般的代理要素 ]

展開した一様かつ多様な諸要素 ]

## 注

- 1) 本稿は、すでに発表した板木（2002）の続編をなすものである。つまり、「社会科学方法論としての弁証法の定式化」の第4節の前半部分に相当する。

## 参考文献

板木雅彦 (2002) 「社会科学方法論としての弁証法の定式化 表象および存在形態と本質（上）（中）（下）」『立命館国際研究』第14巻4号，2002年3月，1 - 25ページ，第15巻1号，2002年6月，53 - 72ページ，第15巻2号，2002年10月，27 - 43ページ

ウィーナー，ノーバート

[ 1961 ]( 1962 ) 『サイバネティックス 動物と機械における制御と通信』第2版，池原止戈夫他訳，岩波書店

子安増生 (2000) 『心の理論 心を読む心の科学』岩波書店

ヘーゲル，G.W.F. [ 1817 ]( 1978 ) 『小論理学（上）（下）』（松村一人訳）岩波書店（岩波文庫）

マルクス，K. [ 第1巻1867，第2巻1885，第3巻1894 ]( 1968 )

『資本論』全5冊（マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳）大月書店

森宏一編 (1985) 『哲学辞典』第4版，青木書店

## Formulation of Dialectics as Social Science Methodology: Forms of Motion in Space and their Functions and Barriers

The present paper succeeds Itaki (2002) 'Formulation of dialectics as social science methodology: representations, forms of existence and the essence (1), (2) and (3)', and actually forms the first part of its Section 4.

Motion in space means motion of an individual thing for acquiring its spatial integration, and motion in time means motion for achieving reproduction of an individual thing, each of which can be analyzed into the individual, particular and general forms of motion. Motion in space is dealt with here in this issue and motion in time in the next issue of the journal.

The relationship among elements in motion in space or time is understood to be functions and/or barriers. Functions mean the work of the general element to intermedate all the motions of elements. The general element has to intermedate ordinary elements' motions because all the relationship inherent in the latter has already been transferred to the former; and thus, intermedation and motion are the two opposites indispensable to each other.

The motions of elements generate not only functions fulfilled by the general element, but also barriers imposed by the general element. As long as a thing remains itself, it certainly has to facilitate the quantitative increase of elements, though at the same time, it has to be equipped with a certain mechanism by which to bar the quantitative increase from exceeding the upper threshold.

As the forms of motion develop from the individual, through the particular to the general forms, the thing produces an appropriate and specific element in each form that functionally represents the general element and makes all the motions of elements much smooth and effective: i.e., the representative element.

(ITAKI, Masahiko 本学部教授)